

# 東京帝國大學

## 地震研究所研究速報

### 第5號

昭和21年12月21日南海大地震調査報告(其一)

昭和22年3月

### 序文

去る昭和21年12月21日南海大地震が起り、高知、徳島、和歌山三県を中心として、西南日本の多くの府県にわたつてからぬ被害の生じたことは、特に戦後後の國歩報の秋、頁に非置の災厄であつた。

さきに昭和19年12月7日東南海地震が起つた時、吾々はこれを西南日本外帯に固有の100~150年毎に起る大地震活動の一相として注目した。然し当時戦時下の種々の障害のため、その調査研究を十分に行ふと

かできず、終戦後更めてこれを見直し、この地震活動の将来の発展に備へようとしてみた。その矢先に早くも今回の南海大地震が到来したことは残念であつたが、その反面、さきの東南海地震の時に通した調査研究の一部を果すことのできる千載一遇の好機を與へられたものとも云ふことができよう。

終戦後、地震の学理、地震の豫知、震災の豫防軽減対策等に關する研究の促進が国内的にも國際的にも一致と要望される時に當たり、これらの研究を中心としてその本系の使命達成に努力しつゝある地震研究所はその研究の資とし、併せてその成果をもつて實際界に大いに寄與するため、機を逸せず今回の大地震の詳しい調査研究に取掛り、現にそれを続けらるゝ。その成果の詳細については後日本前報其の他に発表する筈であるが、取敢ず現にまでに得られた結果の概要を速報としてここに発表することとした。これが學術上ののみならず、震災復旧並に予防対策上の參考資料として活用されることかあれば幸である。

本所が今回の地震の調査研究に機を逸せず取掛ることかできたのは東京帝國大學總長南原繁氏のこの研究に対して寄せられた深い理解により、その所要經費の一部を大學当局からの臨時支出に仰ぐことのできた所である。また実地調査は現地の当局其の他から與へられた種々の便宜と協力とに資う所か少くない。茲に附記して各位に深く謝意を表する次第である。

昭和22年3月

地震研究所長 津原 忠雄